宗門（しゅうもん）では、法要を意義あるものとするために、基本（長期）計画の策定（さくてい）を現在進めているということですので、皆さんのお声をお聞かせ下さい。

（編集者註 ①）「大遠忌」という呼称

五〇年ごとに営まれる親鸞さまの法要を「大遠忌」というそうですが、「遠忌」とはどういう意味でしょう？『広辞苑』には「遠く隔たった年忌」とあります。『本山典礼』には、宗祖の親鸞さまの法要を「大遠忌」、蓮如さんの法要は「大」を抜いて「遠忌」と呼んできたとあります。

では、本山はどういう意味で「忌」という字を使用しているのでしょう。辞書には「忌」は「いむ・いみきらう」とあります。何を忌み嫌うのかというと、血と出産の羊水、そして死です。これら三つの不浄（＝ケガレ）を赤不浄・白不浄・黒不浄と呼んで、日本人は忌み嫌ってきました。このような考え方からすると、「忌日」というと、死を忌み嫌って「物忌みをする日」ということになります。このような習慣は、起源を調べると、七〇一年の大宝令で朝廷に「陰陽寮（おんようりょう）」が設けられて以来、国家の方策から天皇・貴族、そして後には庶民の生活にまで深くかかわるようになったものだということです。しかし、このケガレ意識は、部落差別や性差別（例えば太田房江大阪府知事が土俵に上がれない）など、さまざまなトラブルを生み出す問題の意識であり習慣であるといえます。

では、「大遠忌」とは、親鸞さまの忌日に物忌みをすることでしょうか。蓮如さんによると「当流（真宗）はものいまはぬ（物忌みしない）宗なり」（『御文章』）と、物忌みをしない、死を忌み嫌わないのが真宗のご宗旨だということです。

第六回みんなでスキーに行きましょうの参加者（左から山本将大くん・佐々木謙吉インストラクター・内田俊介くん・岩崎慧くん）。総勢十四名で行ってきました。

このような話も残っています。真宗門徒の平太郎は、教え通り弥陀一仏で神祇不拝（神さまは拝まない）の日暮しでしたが、領主の命令で熊野詣でに行かねばならなくなります。熊野への道中、台風で土佐の船が難破し、打ち上げられた死体に遭遇します。平太郎以外は死を不浄（＝穢れ）と考え（その考えに従えば、穢れに触れたものは一定期間神社の境内（入れないので）、死体に近づかず見てみぬふりをして通り過ぎます。しかし、平太郎だけがその遺体を丁寧に埋めてやったのだという話です。「門徒物知らず」という言葉は「門徒物忌み知らず」という、私たちの誇るべき歴史だと思います。

しかしこの「物忌みせず」の教えが徹底していたかというと、江戸時代、幕府の「忌」を強制した「服忌令」に対し、本山は（いろいろな解釈はあるでしょうが）結果として「俗家同様」物忌みを受け入れてゆくこととなります。つまり、本来物忌みをしない真宗門徒の家に「忌中札」が違和感なく共存するようになるのです。

この「忌」を問う取り組みとして、近隣の五十四ケ寺からなる安芸南組では、約二〇年前葬式の「清め塩」を廃止しました。また最近ではこの辺は「忌中札」もやめました。西教寺では、年回の呼称も「回忌」をやめて「〇周会・〇回会」、「ご正忌」は「ご正当」という語を用いることにしています。一方で「忌」を「つつしむ」と読みかえればよいではないかと、そのまま使用し続ける方もいらっしゃいますが、今見たように、宗門は、江戸期以降は、「忌」についていまはぬのではなく「いむ」という姿勢を容認・拡大してきたのでした。また、その間「忌」を「つつしむ」と読むのだと意味を転換し、本来性を守ろうとした歴史を寡聞にして知りません。その意味で、あえて「忌」を使用し続けることとに何の意味があるのでしょうか。

外食の時でもちゃんと合掌していただくのだ。

本山（総局公室）に問い合わせると、本山の使用する「忌」の意味については答えられませんでしたが、「先日も疑義が提出されており、検討が必要と考えている（橋本中央相談員）」との回答いただきました。「七五〇回大法要」で良いのではないでしょうか？

（編集者註 ②）親鸞さまの没年代訂正

親鸞さまのご命日の一月十六日は、この辺では「おたんや」として親しまれていますが、亡くなられた年はいつだかご存じですか？お経の本の最初に「浄土真宗の教章」というのがあって、真宗の大綱が示されていますが、そこには宗祖＝見真大師親鸞聖人（一一七三～一二六二）とあります。一般には、この一二六二年がご往生の年とされてきましたが、住職は一貫して一二六三年が正しいのだと言い続けておりました。日曜礼拝で浄土真宗の教章を皆で言う時も、わざわざ一二六三年と訂正して読む徹底ぶりです。

これは、一八七三（明治五）年に、これまで使われていた太陰太陽暦（天保壬寅暦）が廃され、現在の太陽暦（グレゴリウス暦）が正式な暦とされたのに対応して、本山も、親鸞さまのご命日である旧暦の弘長二年十一月二十八日を太陽暦に換算したのです。しかし政府の改暦は、正確にはグレゴリウス暦には準拠していませんでした。ご本山の改暦もどこかで間違ったものと思われます。前回の法要は、一二六二年で計算して一九六一（昭和三十六）年に厳修されましたが、今回ご法要に際し、正しく一二六三年と改め、一年遅れて法要が勤まることになりました。

ご命日最勝講法座（めいにちさいしょうこうほうざ）

日時　毎月十六日
八時半～十一時スギ
場所　長ノ木本坊

親鸞さま

お斎（とき）

（十一時スギ～）

仏教徒のお食事のことです。希望者は、当日8時までに、お寺（21）3お申しか込み寄りの講中（精進料理・三〇〇円）。

椅子席です。蔵本通・三津田支坊地区の方もどうぞお参り下さい。

（新講中）久保尚子さん